

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 金成恩

本論文「19 世紀東アジア宣教における翻訳と啓蒙——韓日比較を中心に——」は、19 世紀の東アジアを舞台として行われたキリスト教宣教師たちの翻訳および啓蒙活動に焦点をおき、韓日比較という視点を導入して、その歴史的意義の解明を試みようとするものである。

中国大陸およびそれを半円型に圍繞する東アジア地域の近代化にとって、キリスト教宣教師たちの果たした役割が大きいことは贅言を要さない。翻訳・出版・教育・建築など、布教にともなっている活動はきわめて多岐にわたり、近代東アジアの文化基盤の形成に寄与したことは、よく知られている。従って、この分野における研究にも一定の蓄積はあり、聖書の翻訳語の成立過程や宣教師の布教活動の実態など、個別事例に即した解明も進んでいる。

しかしながら、本論文のように、19 世紀東アジアという時空間を設定し、その時空間における宣教師や協力者たちの翻訳および啓蒙活動を検証しながら、朝鮮半島と日本列島における伝統世界から近代世界への言語的文化的変容を、韓日を往還しながら位置づけようとする研究は、これまでなされてこなかった。また、キリスト教宣教が東アジアにおいて果たした役割を、漢字文化圏という俯瞰的視点を持ちつつ、圏域内における地域ごとの固有性に降り立って比較論証する作業も、充分には為されてこなかった。本論文は、こうした点で、この分野の研究に新しい局面を拓くものと評価できる。

本論文は、序章、第一章「God の翻訳をめぐる宣教師間の用語論争」、第二章「『天路歷程』の翻訳」、第三章「『七一雑報』における言文一致と読者層」、第四章「李樹廷訳『新約馬可福音書諺解』の文体」、第五章「ルーマスによる朝鮮人留学生への教育と布教」、終章の全七章から構成される。構成からも了解されるように、本論文には、大きくわけて三つ、すなわち『聖書』や『天路歷程』などの宗教書における翻訳の問題、近代初頭の宗教啓蒙メディアにおける文体の問題、米国人宣教師らによる東アジア宣教戦略の問題という三つのテーマが内包されている。

第一章は、God の翻訳における日本と朝鮮の差異を、それぞれの言語における「神」概念の相違、宣教師の翻訳態度の分岐を軸に考察し、さらに、漢字に対して仮名とハングルが異なる位置にあることにまで視野を広げて論じている。翻訳・文体・宣教戦略という三つの視点によって、旧来の翻訳論的枠組みを超えた視野を獲得していると言える。

第二章は、バニヤンの宗教寓意小説『天路歷程』の翻訳をめぐる、その朝鮮語訳の原拠テキストが従来の定説であった「文言訳」ではなく「官話訳」であることを文献学的に実証し、その基礎の上に立って、「官話訳」が原拠として採用されたことの意義を解明し、さらに進んで、

キリスト教文献の翻訳における書面語と口頭語の問題、文体とジャンルの問題、宣教師の文体意識の問題を論じる。手堅い実証にもとづいた新鮮な仮説の提示と認められよう。

第三章は、『天路歷程』の日本初訳(『意訳天路歷程』)の文体を論じるために、まずそれが連載された明治期のキリスト教啓蒙新聞『七一雑報』の編者と読者の文体意識のずれを検証し、そこから、宣教師の啓蒙戦略と日本の知識階層読者の意識との齟齬を考察する。宣教師と在地知識人の関係が宣教戦略上重要な意義があることは言うまでもないが、それを文体の問題として論じるのは、斬新な視点である。

第四章は、李樹廷による朝鮮語訳福音書の文体が漢字ハングル交じり文であることに着目し、彼の日本滞在の経歴や在日宣教師ルーミスとの関係を明らかにして、朝鮮における宣教において漢字ハングル交じり文がいかなる背景をもって登場したか、それはどのような意味があったかを具体的に考察する。翻訳論・文体論としてのみならず、東アジアにおけるキリスト教宣教戦略を、新たに発掘した史料にもとづき解明した点においても、功績は大きい。

第五章は、第四章で取り上げたルーミスの宣教戦略をさらに追究し、これまで研究されてこなかった書簡から、その実態を解明する。この時期の米国宣教師が東アジアにおける中国・日本・朝鮮をどのように見ていたか、また米国留学斡旋などの活動がどのように行われていたかを知るための貴重な基礎研究となっている。同時に、朝鮮人留学生たちが日本を経由して米国に行き、さらに朝鮮に帰って独立運動の基礎を為したことの意味を、「米国型の近代的主体の形成による日本の相対化」として捉え直し、朝鮮近代史に新たな展望を拓いたことも、特記されてよいであろう。

上記のように、本論文は、韓日双方にわたる文献を用いて、翻訳・文体・宣教戦略という三つの視点から近代東アジアにおけるキリスト教宣教の歴史的意義を解き明かしたものであり、その着実かつ新鮮な研究は、今後の発展を期待させるに十分なものと思量される。また、本論文のうちの多くの部分がすでに学会誌等に発表され、その研究が韓日双方の学界から注目されつつあることも評価される。

審査委員からは、三つの視点の結びつきが必ずしも明確ではないこと、文体を支える社会階層の規定にやや図式的な面が見られること、宣教師の活動の歴史的位置づけについて不十分な記述があることなどの指摘があった。また、テキスト引用の処理において不適切な場合があること、論述のスタイルが最初と最後では統一が取れていないことなどの指摘もあった。ただし、これらの指摘は、今後の課題として生かしうるものであって、本論文の功績を本質的に損なうものではないことも、全員一致で確認された。

したがって、本審査委員会は、博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。